

地ひびき



323号

お知らせ

「斎藤 清 詩集」について

丸岡 稔

発行がおくれて申し訳ありません。めぐみ工房さんが今年中に出せるようががんばって下さいましたが、斎藤さんのご遺族からの資料がまだ届いていませんので来年に持ち込むこととなります。

先日、平山さん、伊藤さん、濁川さんに見て頂きましたが、「もうこんなに進んでいたのですか」と喜ばれました。

上、下2巻になります。

上巻は「大地の歌」、下巻は「ツルハシ日記」「子どもの詩」で夫々280頁です。

この度の号で、その中から数編紹介致しました。

斎藤清さんの人間性と豊かな感性、そして香わしい言葉の世界を垣間見ることが出来ると思います。

牝牛に

愛しあうところから

出なおしていこうよ

みぞれには

櫛毛でもすき合いながら

雲のことでも思っていようよ

あたたかいところから

すべては生れると思うゆえ

つまずきはいたわりあって

しみじみと生きてゆこうよ

ひたむきなものだけが

この世を飾る

その日まで

きぬさや

きぬさやの

はつなりをもぐ

なすままに

まなごつむりて

きぬぎぬの

つゆにはじらふ

みのあをき

ほそききぬさや

きぬさやの

きぬさやのはつなりをもぐ

出征

一銭五厘の赤紙

馬よりも安いいのち

口づけも交さず

征く者

送る者

雄々しく立派だった

ああ小さな日の丸を振って

日本の青年はかなしかった

コップの酒

無慈悲の愛をたたえて

しつとりと沈んだこの美しいものが

父をほろぼしたのです

怯懦な私はつえに親子として酌み合う日もなく

孤独の父を凍寒の野に追いやりました

人も財もおそれず

明治の一徹をたかぶらせ

絶望と貧苦の底に不安な孝心をためされつづけてきた

コップの酒

琥珀の液体に秘められた

わが家の歴史ほど悲しいものはありません

疲れに利くと

母のついでくれた一杯の酒を口にふくんで

私はしみじみと亡父の悲泣をきいているのです

暴君

お膳を投げつけたとき

心底 あなたが憎いと思った

母といっしょに立派に生きて

見返してやろうと幾度もおもった

そんなあなたが居なくなつて

どうしてこんなに淋しいのです

ああ 怒りだけを怖れて人への祈りを忘れはてた

わたしの痛切を知って下さい

ひとりの父を非情の寒野にさらしつづけた撞着のむくえを

警鐘のように吹いて乱れる嵐の夜半です

原爆は世界を制するものではなかったのに

文義に

おれは

お前が生まれてくるのを見ていたぞ

はりさけるようなせつない力で

お前が生まれてくるのを見ていたぞ

男の子だといったら

かあちゃんは目をつむって

ふかい大きなこつくりをした

おれはかあちゃんの手をしっかりと握って

お前が生まれてくるのを見ていたぞ